

学位請求論文審査報告書

氏名 松岡淳爾

学位の種類 博士（文学）

学位論文題目 親鸞の浄土観—真仮の仏土と大涅槃—

論文審査委員（主査）大谷大学教授 加来雄之

（副査）大谷大学教授 井上尚実

ph.D [カリフォルニア大学]

（副査）大谷大学教授 三木彰円

（副査）大谷大学名誉教授 織田顕祐

博士（文学）

I. 論文内容の要旨

本論文は、親鸞（1173 - 1262）の独自の浄土理解である真仮の仏土を一貫して涅槃の境界として見ることによって、親鸞が受容した『大無量寿経』の浄土の意義を再考し、消極的見解に埋没している〈真・仮〉本来の有機的關係と、そこに明らかになる真仮の仏土の具体性をあきらかにすることを目的とする。

まず親鸞の〈涅槃〉観を、『大般涅槃経要文』、さらには〈無量寿経〉諸本によって確かめ、その上で、『顕浄土真実教行証文類（以下、『教行信証』）』の真仏土卷・化身土卷に引用される『大般涅槃経（以下、『涅槃経』）』を手がかりとして、真仮の仏土が「涅槃界」という一つの境界の内容であることを明かしている。とくに真の仏土が摂取のはたらきを、仮の仏土が教化のはたらきを表す境界であることを、〈涅槃〉の概念によって際立たせ、しかも両者の關係が平面的・排他的ではなく、立体的・重層的な關係であることを論じている。

論文の構成は以下の通りである。

序章

第一節 研究の背景

第二節 研究の目的

第三節 研究の方法

第一項 〈親鸞の浄土観〉解明の手がかり——『涅槃経』への着目——

第二項 「文類」・「要文」解釈の指針——引文指示語「已上」への着目——

第三項 本論の構成

第一章 親鸞の『涅槃経』観——『大般涅槃経要文』を通して——

第一節 『大般涅槃経要文』の先行研究とその諸問題

第二節 『大般涅槃経要文』の主題と構造

第三節 六成就——「乃至」された衆成就に関する問題提起——

第四節 少欲知足の菩薩

第五節 欲見仏性の具体性

第六節 大般涅槃と業報差別

小結

第二章 〈無量寿経〉の浄土と〈涅槃〉

——『教行信証』への展開をふまえて——

第一節 仏仏相念——阿難の問いに見出された念仏の境界——

第二節 阿弥陀仏の浄土

第三節 〈無量寿経〉における〈涅槃〉の諸相

第四節 『教行信証』における〈涅槃〉の展開

——必至滅度と証大涅槃の関係を手がかりに——

第三章 真仏土——大悲の意欲を成就した光明摂取のはたらき——

第一節 「真仏土巻」開頭の意義——真仮分判の課題を通して——

第二節 光明寿命の願——既にして願います——

第三節 『涅槃経』引文の構造的な理解への試み

第四節 大涅槃とは何か

第一項 光明無量・寿命無量と大涅槃との呼応

第二項 常楽——証果の内容としての大涅槃——

第五節 大般涅槃の意義——選択本願の正因に由って真仏土を成就せり——
カサヌ

第六節 仏性と衆生の関係——普遍的問題としての「一闡提」を手がかりに——

第七節 光明摂取の具体性

第一項 如来知諸根力——教化の言説を生み出す原動力——

第二項 聞見仏性から帰命・願生へ——『浄土論』引文の意義——

第八節 顕仏性

第一項 親鸞の仏性論——仏土の視点の導入——

第二項 顕仏性のための「起信」という課題

第四章 化身土——如来の悲願が教化としてはたらく境界——

第一節 「化身土巻」開頭の意義——悲願の背景とその課題——

第二節 信楽受持の難——『大経』から『涅槃経』への展開をふまえて——

第三節 『涅槃経』引文の構造的な理解への試み

第四節 如来の「有為涅槃」として現れる化身土——善知識と三種の善調御——

結章

第一節 親鸞の浄土観

第二節 なぜ仏教で浄土が説かれるのか——親鸞の浄土観を通して——

第三節 今後の課題

序章では、先ず研究の背景として、(1)「真仏土巻」は、その四割以上を『涅槃経』の引文が占めるように、真の仏土を涅槃の境界として明かしているが、これまでの研究では、その具体性や仮の仏土との関係は十分に意識されていない。(2) 親鸞は、真化二巻に善導(613 - 681)の「極楽無為涅槃界」の文を引用し、真仮の仏土を共に「涅槃界」として示唆するが、真化二巻の『涅槃経』引文の接続についてはこれまで主題的に考察されてきていない、という二点をあげている。次に研究の目的について、真仮の仏土を一貫して涅槃の境界として見ることで、親鸞が受容した『大無量寿経』の

浄土の意義を再考し、〈真・仮〉本来の有機的關係と、そこに明らかになる仏土の具体性を引き出すことにあると述べる。最後に、研究の方法について、主に真化二巻に引用される『涅槃經』を手がかりとする理由を、(1)「真仏土巻」の大部分を『涅槃經』引文が占め、さらに結帙で再引されるなど、『涅槃經』が『大經』と共に「真仏土巻」の論理の軸を形成していること、(2) 上述したように善導の文が真化二巻に引用され、真仮の仏土が共に「涅槃界」として示唆されていること、(3) 『教行信証』全体にわたって『涅槃經』の引用が多く、『涅槃經』に基づく和讃や、主に『涅槃經』の抜書文から構成される書が複数存在するなど、親鸞の『涅槃經』に対する関心が非常に高いこと、の三点で示している。

本論は、四章で構成されている。

第一章では、親鸞が『涅槃經』(北本)から抜書した『大般涅槃經要文』を通して、親鸞の『涅槃經』観を考察している。先行研究を丁寧に検討し、構造的な理解を採用することで、〈涅槃〉がいかなる課題を担って親鸞の思想体系に位置付けられているのかを明らかにしている。

第二章では、まず〈無量寿經〉で浄土が説かれる機縁について確かめ、次に浄土と〈涅槃〉との結び付きという観点から浄土の因果を捉え直し、そこに浮かび上がる〈涅槃〉の諸相を見定めている。さらに、それらの〈涅槃〉の諸相が『教行信証』でいかに展開されているのかを考察している。とくに本章では、漢訳諸本のみならず、サンسكريット本にまで対象を広げて〈涅槃〉の概念を考察している。

第三章では、真の仏土について、「真仏土巻」の『涅槃經』引文を中心に考察している。とくに、『涅槃經』引文に至るまでの道筋として、真の仏土の根拠となる『大經』の光明無量・寿命無量の願を「大悲の誓願」として明かし、その上で、その大悲の精神が摂取のはたらきとして現れることを、『涅槃經』引文によって論証することを示している。特に、親鸞は「大涅槃」と「大般涅槃」を概念として区別しているとし、「大涅槃」による宗教的主体の実現を「大般涅槃」と定義している。

第四章では、親鸞が顕す仮の仏土について、「化身土巻」の『涅槃經』引文を中心に考察している。まず「化身土巻」開頭の意義を確かめ、『大經』から『涅槃經』への接続を概観し、仮の仏土が教化としての悲願のはたらきを象徴する境界であり、その教化のはたらきは、「大涅槃」が「大般涅槃」として宗教的主体を衆生に実現するところからさらに展開し、その衆生を媒介として言葉となって現れ出てくるところに捉えられるとしている。

結章では、親鸞の浄土観について、浄土とは如来の大悲のはたらきそのものを象徴した世界であり、真仮の仏土は共に「涅槃界」の内容であり、真仮の仏土による摂化のはたらきが一体となって初めて、衆生は如来内存在として定位されるとする。親鸞においては、そのように真仮という立体的構造を持った仏土のダイナミックなはたらきこそ「大涅槃」であり、そのことは、浄土も〈涅槃〉も徹底的に他力の立場から語ろうとする親鸞の思索によってこそ明らかとなると結論づけている。

II. 論文審査結果の要旨

親鸞の浄土理解について語られるとき、『教行信証』に展開される内容と、『教行信

証』以外の著述、たとえば『消息』類に展開する浄土観との区別がかならずしも明確にされず、結果、通俗的な浄土理解を克服されずに了解されていることが多い。また親鸞が『教行信証』において浄土を真仮の仏土として展開した思想的意味についても、金子大栄などの業績があるにもかかわらず、学界で十分に受け入れられているとはいえない。また佐々木月樵が『教行信証』における大乘の三部経として『大無量寿経』『華嚴経』『涅槃経』をあげているように、親鸞の思想において、とくに浄土理解について『涅槃経』が重要な位置を占めることは疑うことはできない。そのため『教行信証』と『涅槃経』の関係や、真仏土を涅槃界として考察する研究は多数存在する。しかし、本論文が指摘するように、『教行信証』における真仮の仏土を〈涅槃〉界として理解し、さらに真の仏土に仮の仏土へと展開する関係を〈涅槃〉という概念を通して考察する研究は十分とはいえない。

本論文の業績は、真化二巻における『涅槃経』の引用を手がかりとして、親鸞が『大無量寿経』に説かれる浄土を真仮の仏土として展開した意義を、〈涅槃〉界という一貫した視座から徹底して明らかにするところにある。審査員からは、課題・方法論が明確であり、叙述も分かりやすく、独創性もあるとして、高い評価をえたが、いくつかの課題や問題点も指摘された。以下、本論文の評価できる点と問題点を略記する。

まず第一章は、親鸞の〈涅槃〉観を『大般涅槃経要文』によって確かめている。このテキストについては、文献的な研究、概説的な紹介が中心で、思想的な研究がほとんどない。その中で、親鸞の解釈法（訓読、左訓、引文指示語による構造的な理解）に注目した緻密な読解によって、親鸞の〈涅槃〉観を明らかにしようとする試みは評価されてよい。審査員からは、親鸞のもう一つの『涅槃経』の抄出である『見聞集』所収の『涅槃経』との関係など、書誌学的な確かめについてさらに考えるべき点があること、第一章の詳細な論述が果たして本論文の主題にとって必要かという構成上の問題が指摘された。

第二章では、〈無量寿経〉において阿弥陀仏の国土を涅槃の世界とする淵源を、サンسكريット本を含めた諸本によって尋ねることは、真宗学の論文としてこれまでなかった方法で評価できる。しかし、審査員からは、第11願文の「yāvan mahāparinirvāṇad」の「yāvat」を条件節とする訳など、再検討が必要であるという指摘がなされた。

論文題目からも明らかなように、第三・四章が本論文の中心である。第三章は、『涅槃経』が『大経』と共に「真仏土巻」の論理の軸を形成しているとして、両者の深い呼応関係を、両書に使用される概念に注目して明らかにしている点、また真の仏土が仮の仏土として展開する必然を〈涅槃〉の視点から論じている点、とくに親鸞においては「大涅槃」と「大般涅槃」が区別されているとし、「大涅槃」による宗教的主体の実現を「大般涅槃」と定義する点、つづく第四章で、仮の仏土を教化としての悲願のはたらきを象徴する境界であり、その教化のはたらきを前述の「大涅槃」と「大般涅槃」との関係によって捉えている点は、従来にはない見解である。審査員からは、これらの視点は斬新だが、だからこそさらなる慎重な論証が必要である、たとえば「大般涅槃」を到達点ではなく線的に理解するなど、ここまで積極的に表現することができるのかという疑問が残るという意見が示された。また真仏土巻・化身土巻の考察が中心

となっているが、『教行信証』では行巻や信巻にも『涅槃経』が引用されているので、『教行信証』全体の構成について論じた上で、それらとの関係を考察するべきであるとの指摘がなされた。

一名の審査員からは、本論文が親鸞の引用に限定して論述していることについて一応の理解を示しながらも、『涅槃経』という経典そのものに展開される独自の論理や文脈を十分に理解した上で論じるべきである。たとえば、『大般涅槃経要文』の表紙裏に記された六味の記述も、『涅槃経』本来の文脈から照らしかえせば、「大般涅槃と業報差別」（第一章第六節）という課題についてさらに展開できたであろう、などの指摘がなされたことを付言しておく。

本論文は、以上のようにいくつか残された課題はあるが、本論全体を通してみると、親鸞の浄土観における『涅槃経』の役割について、従来の研究では等閑にされていた箇所や事柄も丁寧に取り上げて独自の視点や新たな解釈を提示しており、学位論文として十分な水準を有するものと評価できる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により、2021年1月13日に試問を実施した。その結果、審査委員一同一致して、松岡淳爾に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。